

# ららばい、通信

## Lullaby News

2022年  
夏号

猛暑の夏、  
活字に触れて



画/大野隆司

### [ 目 次 ]

- |                                |           |                                |           |
|--------------------------------|-----------|--------------------------------|-----------|
| ■ 夏の歌                          | …1        | ■ 連載 「白隠さん 最後の大役」              | 帯津 良一 …12 |
| ■ シングルマザーに思う事                  | 西館 好子 …2  | ■ 日本子守唄紀行<br>「根来の子守唄」          | 鵜野 祐介 …14 |
| ■ 特別寄稿 「孫に引かれておじじの目覚め」         | 青山 司 …3   | ■ 連載 直島便り<br>「コロナ過でもアートは変わらない」 | 山根 光恵 …16 |
| ■ COLUMN/自戒のことば                | 良寛 和尚 …4  | ■ INTRODUCTION/『士・黙示録』         | 山田道幸著 …17 |
| ■ 新連載 子ども虐待は、今<br>「体罰の禁止」      | 川崎 二三彦 …6 | ■ 活動報告                         | …17       |
| ■ 絵解き 風流子ども歳時記<br>夏の絵暦・うたごよみの巻 | 尾原 昭夫 …8  | ■ 寄付者名簿                        |           |

2022年7月発行



令和4年

ららばい通信夏号を  
お手元にお届けさせていただきます。

モクモクわいてくる入道雲、花火や祭りや遊びに心躍らせた夏。

子どもたちが遊び、蚊取り線香のいぶる座敷、…あ、そんな夏の風景はもはや昔の風景ですよ。

梅雨もだいぶ変わってきました。雷と巨大な雹、寒暖差の激しさに体に変調をきたしてしまいました。暑さの中でマスクで顔を覆い、さて今日は、何を着たらいいのかさっぱりわかりません。コロナは何もかも変えてしまいました。なにもかも。この先は全く不透明です。

そんな中でも、続けられる限りららばい通信は発行し続けます。季節の折目は日本の文化のよさがありつづける限りです。

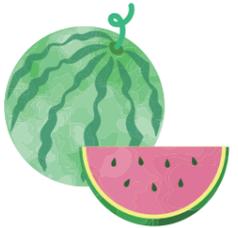
1000年も続く歴史を継承し、わび、さびをうたい、礼節や道徳心をもつ日本、世界が称賛した見事な子育てを、今こそ、思い返したいという願いは、旧世代的な時代遅れといわれても、発信し続けたいと思います。今年の夏をお届けさせていただきます。

日本ららばい協会 理事長 西館好子



ロシアとウクライナの戦争は長引きそうです。

眼を皿のようにしてテレビにかじりつき、毎日の戦火の状況を見ていたのに、悲しいかな、飽きた、もういい、と感じるようになってしまいました。



怖い映像文化

日本ららばい協会

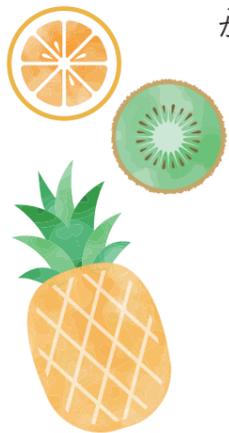
理事長

西館好子

「子どもはどう感じているのだろうか」「戦争ゲームか、コンピューターの世界の出来事として記憶されていくのだろうか。よその国の知らない人たちの物語、くらいに思っているのだろうか。10歳の子供に投げかけてみたら「怖いけど、面白いチョーヤバイ」と返ってきました。

晩酌をしながら、CMになればチャンネルを変えて、又、戦争場面に戻していく。もはや、北朝鮮のミサイル発射など、どれほど海を汚し環境を壊しているかなど、誰も気に留めなくなつてしまった現実。

どう識者が解釈や解説をもっともらしくしても、逆に扇動とさらなる恐怖の予言に過ぎないと思えない。私達は実は心の虚脱を今一度自省する時期に来ているのではないだろうか。



夏のうた



「かたつむり」

でんでんむしむし かたつむり  
お前のあたまは どこにある  
つのだせ やりだせ あたまだせ  
でんでんむしむし かたつむり  
お前のめだまは どこにある  
つのだせ やりだせ めだま出せ

「富士山」

あたまを雲の上に出し  
四方の山を見下ろして  
かみなりさまを下に聞く  
富士は日本一の山  
青空高くそびえ立ち  
からだに雪の着物着て  
かすみのすそを遠く曳く  
富士は日本一の山

「砂山」

海は荒海 向こうは佐渡よ  
すずめなけなけ もう日はくれた  
みんな呼べ呼べ お星さま出たぞ  
暮れりや砂山 しおなりばかり  
すずめちりちり また風荒れる  
みんなちりちり もう誰も見えぬ  
かえろかえろよ くみわらわけて  
すずめさよなら さよなら あした  
すずめさよなら さよなら あした

「螢」

ほたるのやどは川ばたやなぎ  
やなぎおぼろに夕やみ寄せて  
川のメダカが夢見る頃は  
ほ ほ ほたるが灯をともし  
川風そよぐ やなぎもそよぐ  
そよぐやなぎにほたるがゆれて  
山の三日月かくれる頃は  
ほ ほ ほたるが飛んで出る  
川原のおもは五月の闇夜  
かなここなたに友よびつどい  
むれてほたるの大まり小まり  
ほ ほ ほたるが飛んで行く



# シングルマザーに思う事

西館 好子

好き好んでシングルマザーになったわけでも、その生き方を選んだわけではありません。深く考えた末、あるいはやむを得ずそうなってしまうた女性もいるでしょう。大半は離婚が原因ですが、結婚には相手もいる事ですから、相手の意志も左右しているはず。

理由はさまざま個人によって違うので、うが一人で子育てしているからの総称としてシングルマザーという言葉が、最近ではまるで特権の様に出はじめ、時に肩書のように使われる世の中になってしまいました。

戦後に母親になった私やその世代の女性たちにとっては、考えられないことです。離婚などまれでしたし、母親とは常に家に居て、父親と対というものが、家庭なのだ当たり前に思い、苦勞や我慢をする権化に母親の存在があると信じていたのですから。

時代は変わり、個人の意思や自由が叫ばれ、人生の選択肢が多様多様になり、母親の生き方が大きく変わってきたことは認めざるを得ませんが、そのことで子供の世界もまた変わってきたことも問題を大きく考えなくてはなりません。

家庭は小さな社会の典型であり、近所づきあいは地域の輪を作り、お互いが助け合うというのが当たり前でした。その社会制度は崩れ、自由と平等、男も女も社会参加が当然となれば、シングルマザーの多くが離婚という選択で、一人子育ての道を選べるのも時代の流れと思われれます。

い物が当たり前になり、情報は自国も他国も共有される現代と、時代の変化はあまりに大きく変貌しました。この先に私たちの生活がどう安定していくか、大きな課題を突き付けられたのです。

「子どもこそ未来」の中で、母親たちのありようが日本の未来を決めていくと私は思います。とりわけ、シングルマザーと言われる女性たちの責任や生きようはこれからわたしたちの未来を担っていくとさえ思います。

その現実にしつかり向かい合っているシングルマザーも多く、あつぱれと舌を巻くほど、自分の生き方に自信を持ち、社会や子育てに頑張っている女性もいます。泣き言も愚痴も言わないから、だからこそ、応援したくなり、出来るだけの寄り添いと励ましたいと思つてしまいます。

勿論「くたばれシングルマザー」と言いなくなるような女性にも会うことはままあります。勝手気ままを自由とはき違え、他人や行政に頼るのは当然、育児放棄や貧困の中で自暴自棄になっているシングルマザーや、最後の最後まで人のせい、何かのせいにして、心身を病んだという女性もいます。結果、育てられる子供たちが多動や礼儀も学んでいない子がほとんどです。

共通しているのは、自負心が強いわりに依頼心が強く、主張は理屈通りでも、義務感に欠落しているように思います。

どんな事情であれ、子供のことを最優先に考え、ららばい協会では「配食」をはじめ、毎月二回、ほとんどハーベストさんの支

援を受けて、相談室を設けつつ、日常の食料や飲料を配布する活動をしています。本当に食べるに困るといふ貧困の方に届いているのか、は疑問ですが、喜ばれていることは疑いありません。

あえて、批判も受けることを承知で私の持論を云わせていただければ、離婚という大変な決断の末に子育てをしつつの女性の自立は、相当な覚悟と体力と未来へのビジョンが必要です。自分を育て、自分の未来に賭けてみる夢や、実現させる現実的な目も無くてはなりません。

誰かが何かを用意してくれておんぶにだつこに肩車を要求するシングルマザーにはなつて欲しくないとしみじみ思います。

そんな女性たちと一緒に子育てと生活が愛しくなる「女性村設立」を考えて、群馬県下仁田にその拠点を作ろうと思いましたが。

コロナもあり、なかなかスムーズにいかない時間がありました。が、やっと動き出しました。

シングルマザーの応援は実はシングルマザーの中から生まれ、シングルマザーの各人の生き方から始まらなくてはならないとつよく思い、母子の笑顔が町を満たすことを夢見ています。



## 特別寄稿

# 孫に引かれて おじじの目覚め

日本ららばい協会会員 五行歌歌人 青山 司

自分の結婚時期が遅かったため、初孫が授かったのも現役リタイア後の66歳の時でした。それまでカラオケなどで知人たちの歌う大泉逸郎の「孫」などを聞くと、心のどこかに、白けたものを感じていました。しかし現実には孫が産まれてみると、それ迄の自分などどこかに、吹っ飛んでしまいました。出産後、娘は2カ月ほど里帰りしました。その時家内は長期入院中で、ベビーバスでの初孫のお風呂は全部おじじの僕の担当でした。昭和24年うまれの子の僕は、お産はどこ

の家でも皆自分の家でした。産婆さんが自転車に駆けつけて来るのです。9人兄弟の9番目の僕は長兄に子供が生まれたとき7才で、毎日通ってくる産婆さんがたらいのお湯に乳児を仰向けに入れていたのを、じっと見ていました。そんな記憶は長年忘れていたのですが、自分に子が生まれた時、突然よみがえ、授かったふたりの娘の風呂は全部僕がやりました。そしてまた孫が生まれ

るまで、その記憶は消えていきました。そしてまたび記憶がよみがえり平気で孫の湯あみ担当となつたのです。娘にとっては大助かりだったと思いつす。そのあと3000グラムの初孫を、左腕に抱いて晩酌をする、これが又たまらない至福の時なのです。こういう酒は今まで飲んだことがない。安い酒なのに極上の味がするのです。

その孫も早や5才半に成長し、近頃では「失礼しました」などと、大人びたことを言うようになり驚いています。娘の家は500メートルほどの近さで、今では孫が3人になり、毎日うえぶたりを近場の保育園に送迎しています。よく遊びに来ますが、近所の人たちが判で押したように「孫はかわいいでしょう、責任がないからいいわよね」と言われ、すごい違和感をおぼえています。別に悪意があつて言っているわけではないのは、解かるのですが、初孫を抱いた時僕が一番に感じたことと真逆でした。赤ちゃんのぬくも

りと特有の甘い匂いに包まれた時、祖父としての覚悟に目覚めたのです。「この孫のためにいい加減な生き方はできない、定年後をのほほんと生きてきたが、新たな責任が出来た、孫に迷惑となるような祖父には絶対ならないぞ」というものでした。自分の子の時には、そんな気持ちになる余裕はなかったのかもしれない。揉め事やトラブルなどその他もろもろ、社会の汚点になるような生き方には、絶対してはならないと強く思っていたので、世間さまの言う責任がなくて云々には、承服したいものがありました。しかし人は人、己は己と割り切つて孫の手助けをすることにしました。そしてこの時も強く決意したことがあります。子育てに関して、娘から相談を受けない限り、一切こちらからは何も言わないこととしました。自分が娘を育てた昭和50年代後半と現在とはあまりにも状況が違ふ。おそらく多くのじじばばが、いちいち口出しするのは自分の過去の子育てに満足していないかつたか、あるいは失敗したという後悔の意識があるからではないだろうか。僕自身子育てが上手いこととは思っていないけれど、親子関係にたつぷりと時間をかけたという自負があります。しかし自分の時の子育ての実態のほとんどは忘れており、娘の子育てを見てみると、あらためて身につまされることや、ああそうだったと思ひめぐらせます。不思議なもので、娘も父親の僕とおなじような眼差しで子育てをしているのです。「氏より育ち」という言葉がありますが、見えないところで肝心なことは繋がっているなと思うのです。そんな時は親子の深いえにしを感じて、



初澤 永子

ららばい春号の世界の子供をみて  
輪のある絵が秋田県鹿角から送られてきました。

こうして人類は脈々と、続いてきたのだなと思  
うのです。老いては子に従えの通り、とにかく第  
一線で、子育てをしている当事者の娘のやり方を  
最優先させます。親としての意地だとかプライ  
ドなど子育ての現場では有害でしかありません。  
娘と孫の暖かな関係性を築くために、おじじが  
邪魔になつてはならないのです。まずこれがおじ  
じの目覚めの一つです。

さて保育園の送迎では色々なことに遭遇した  
り、驚きやショック、感動など盛り沢山です。ほ  
くの時は自分が現役世代で、家内が専業主婦だっ  
たので保育園ではなく幼稚園でした。朝10時に  
園バスが迎えに来て、午後2時半に帰ってくるの  
で毎日大変だったらしい。保育園は親が働いてい  
るのが原則ですから、朝は7時から夜は8時まで  
預かってもらうことができます。僕の孫の場合は  
朝8時半から午後4時半くらいでの送迎です。朝  
ほどの母親も血走っています。すぐ職場に行かな  
ければならないのです。毎日顔を合わせてこち  
らから挨拶をしても、返事があつたりなかったり。  
ニコニコのママさんや、険しい形相のママさん、泣  
き叫ぶ幼児を置いて逃げるように車で出るママさ  
ん。泣いている園児をひよいと受け取った保育士  
さんたちはあつという間に背中におんぶしてしま  
う。その手際の良さは感動ものです。女性の逞し  
さ、母性のすごさ、玄関はいつもドラマに満ちて  
います。いつも思う、この保育士さんたちに金メ  
ダルをかけてあげたい。僕の孫も玄関を過ぎ  
れば、保育士さんたちのもの。改めて保育は女性  
の天職ではないかという、二つめのおじじの目覚  
めです。後ろ髪ひかれながらも安心して感謝し

ながら園を後にします。

最初のうちは人生経験のある筈(?)のぼくも  
いろいろ戸惑いました。慣れてくるにつれて、少  
しずつ見えてきます。毎日当たり前のように保  
育園の送迎をする。その一方、深刻な発展途上  
国の幼児たちはどうだろうか。戦禍のなかの子  
供たちはどうだろうか。この子たちの20年後  
30年後はどうだろうか。そこまで僕は生きて  
いないかもしれないが、園庭で飛び回っている小  
さな命たちを見ると、そんなことを考えざるを  
得なくなりません。更に最近目にするようになっ  
た内密出産、匿名出産、秘密出産、赤ちゃんポス  
トなど、深刻な現実にも関心が向くようになり  
ました。すでに1999年頃には、ドイツで匿名  
出産に対応する仕組みが作られたと言われてい  
ます。我々日本人はすぐ直情的に、良し悪しを  
論じたがります。自己責任や親の自覚の欠如を  
責め立てたりします。しかしそれだけでいいのか。  
三つめのおじじの目覚めです。今まではそういう  
情報は、三面記事として読み流していました。家  
にこもつて外に出なければ世の関心を失っていた  
かもしれない。家庭内や保育園での幼児たちの  
はちきれぬ命の輝きに接していると、親がいて子  
がいてそれで当たり前、という幻想に突き当た  
るのです。子育て、幼児教育、福祉行政、その根底  
に何を据えるのか、人が人を育てることの根本理  
念は何なのか。人間の深層心理までほりさげて、  
考えなければならぬのではないか。孫に引かれ  
て園の送迎のたびに、いつもこのテーマにぶつ  
かるのです。おそらくこういう問題を割を食ってい  
るのは、寄る辺ないママたちなのです。

男のひとり料理

絵・文 永瀬 嘉平  
(元毎日新聞記者、ナチュラリスト)

玄米がゆの精進



発芽玄米のかゆの中に  
アシタバの葉を刻み入れ、  
1Hから下したら、ミソ汁のニンジン、ネギと  
数時間前に摘んだ、のびる(はら油と七味)  
でつけ込む。を添える。

ニンニクの芽とエリンギの炊き込み



ニンニクの芽をぬめりすりし、エリンギも  
うすくすり、はら油、塩、サトウ、炒飯の素  
を入れて炊き込みごはん。

なんか誰もが思い当たることありません?

COLUMN

自戒の「ららばい」

良寛 和尚

言葉の多き 口のはやき さしで口  
手がら話 へらず口  
唐言葉を好みてつかう  
おのが意地をはりとほす  
もの知り顔のはなし  
この事すまぬうちにかの事いう  
くれてのち其の事ひとにいう  
返すといいてかえさぬ  
にくき心もちて人を叱る  
悟りくさきはなし  
ふしぎばなし  
神仏のこところがろしくさたする  
人にもくれぬさきにその事いふ  
おれがこうしたこうしたといふ  
この人にいうべきをあのひとにいふ  
鼻であしらふ にげごとをいふ  
はなしの腰をおる おどけのかうじたる  
おのが得てにかけていふ  
ぐちたわごと  
あらかじめのもの吉凶をいふ  
つけごとの多き 口上のながき  
ひとつひとつ数えたてものいふ  
みだりに約束する  
しもべを使うに言葉の荒き  
客の前に人を叱る いらぬ世話やく  
口を耳につけてささやく  
をろかなる人をあなどる  
かたことをこのみてつかふ

# 体罰の禁止

子どもの虹情報研修センター  
川崎 二三彦

**日本子ども虐待防止学会**  
第27回学術集会 かながわ大会

誰ひとり取り残さない  
~ 思いをカタチに ~

ハイブリット開催  
2021年  
12月4日(土)  
~ 5日(日)

会場 / パシフィコ横浜ノース 横浜西区みなとみらい  
大会長 / 清水 直樹 聖マリアナ医科大学 小児科学教室 教授  
実行委員長 / 川崎 二三彦 子どもの虹情報研修センター センター長  
主催 / 一般社団法人日本子ども虐待防止学会 / 日本子ども虐待防止学会第27回学術集会かながわ大会実行委員会

もレッスンが優先され、学校を欠席してでも朝から晩まで練習を強要され、間違えるたびに下着を脱がされ、革のベルトでお尻を鞭打たれる。失敗すれば食事抜き、高熱が出ても、指を怪我しても、鍵盤が血で染まっても練習は休めない。

ラファエル先生は、そのようにしてコンクールで常に優秀な成績を収めていったものの、10年以上にわたる虐待行為の果て、ついに「コンサートをこなしながら暮らす人生は絶対に嫌」と決意、信頼できる養護教諭にこれまでのことを打ち明け、養護教諭の援助のもと、保護を願い出たのであった。父は納得せず、保護後の様子も決して順風に進むようなものではなかったが、最後は医師となって私たちを励ましてくれている。

## 「歴史があるんです」

それはさておき、彼女にインタビューしながら、私は、かつて支援した中学生男児のことを思い出していた。彼は、さまざまな事情で3歳の頃から母方祖母に育てられていたのだが、再婚した母が近くに住むようになり、母に引き取られたのであった。

高卒後、苦勞をしながらようやく経済的な安定を得た母は、10年近いブランクを経て一緒に暮らすようになった彼に、是が非でも大学に入學してもらいたいと期待する。「おばあちゃんの育て方は甘い」と考えた母は、再婚した夫(男児の継父)にも協力してもらい、暴力を振るってでも机の前に座らせ、勉強を強いる。事実、彼の成績は目に見えて向上し、学校の教師も高く評価するのであった。こんな様子など、ラファエル先

生がコンクールで優勝し、父の虐待を知らぬピアノ教師が喜ぶ姿と二重写しになってしまふ。

一方、彼は暴力に耐えられず、家出して祖母宅に逃げ込む。最初は、「本当のお母さんなんだから、我慢しよう」と諭していた祖母も、逃亡が繰り返され、最後は暴力によって眼窩底骨折を負った彼の姿をみて警察に駆け込み、児童相談所での保護に至ったのであった。当時児童相談所の職員だった私は、母と出会うことになった。

「いきなり殴りつけたりしませんよ。勉強すると約束しても、すぐにそれを破る。だったら、『今度は叩くよ』『次はこんな叩き方では済まないよ』となるでしょ。歴史があるんです!」

「成績も上がった。そんなときは褒めてもやりました。悪いことばかりじゃありません」

骨折するようなひどい暴力、虐待であっても、反省する気持ちにはなりにくい様子。この点もラファエル先生の父と似通っていた。

「勉強できなくても生きていける」  
彼はこう述懐する。結局、骨折の手術を終えた後は、母にも了解してもらって再び祖母の元で生活し、高校にも入学したのだが、体罰によるしつけは、必然的にエスカレートし、いずれは虐待と言わざるを得ないところにまで至ってしまう典型的な例だったのではないだろうか。

## 体罰禁止の法定化

ラファエル先生は、医師になってからも、自分を苦しめたピアノに触ることを長らく避けていたのだけれど、勤務する緩和ケアの病院にピアノが置いてあり、いつでも弾いていいと言われてい

## 日本子ども虐待防止学会

子ども虐待について、予防活動や防止のための優れた実践を報告したり、問題提起をし、また新しい理論を紹介するなど、さまざまな角度から議論する日本最大の取り組みは、毎年開催されている日本子ども虐待防止学会の学術集会だろう。昨年12月には、この大会が横浜パシフィコで開かれ、オンライン参加を含めて、過去最多の3600人あまりの参加者があった。実は私は、本集会の実行委員長を拝命し、成功を願って微力ながら努力したのだが、私が担当したプログラムの一つに、フランスの医師であるセリーヌ・ラファエル氏のビデオレター講演があった。

## 教育虐待としてのピアノレッスン

彼女は、ピアノの練習に際して、父から想像を超える体罰、虐待を受け、里親や児童福祉施設で保護されながら医師となり、今ではフランスにおける子ども虐待対策について政府に協力し、意見を述べ、具体的な支援活動も行っている。そんな経歴を知り、学術集会にふさわしい方と考えて講演を依頼したところ、すぐに快諾していただいた。ただし、一方的に話すのではなく、質問に答える形にしたいと希望された。コロナ禍を奇貨として、オンラインでやり取りすることも簡単にできるようになったことから、急遽、パリと横浜をZoomで結び、インタビューを実施した。

彼女は、2歳半でピアノレッスンを始めると、フランス内外のコンクールで次々と優勝、入賞を果たすと、父の要求はさらに高まり、レッスンは熱を帯び、必然的に過酷となっていく。学業よりも、あるとき、ふと窓を開けて弾いてみると、入院患者の家族がそれを聴き、つかのま不安を忘れて心が和らいだらしく、そのうち涙を拭うこともなく聴き入っていたという。ラファエル先生は、「このとき初めて音楽の本質に触れた思いをしたのであった。」

私はだから、祖母の元で暮らすようになった彼も、いずれは学ぶことの喜び、大切さを感じる時が来ると信じているのだが、こうした数々の出来事を背景にして、日本でもフランスでも、期せずして2019年に体罰禁止の法定化がなされている。フランスでは民法改正によって、日本では児童虐待防止法等の改正によるものだけれど、日本では今、民法においても体罰禁止を明示し、さらに懲戒権自体をなくす改正が目指されている。意義深い内容だろう。

日本子ども虐待防止学会  
第27回学術集会かながわ大会

ビデオレター講演  
セリーヌ・ラファエル医師

Zoomインタビュー  
パリ ↔ 横浜  
教育虐待の被害者として語り  
医師として虐待予防に取り組む

逸脱

# 風流子どもも歳時記

夏の絵暦：うたごよみの巻

わらべうた研究者 尾原昭夫

自然は友だち



雨の菖蒲と燕  
山本昇雲画 筆者蔵



菖蒲と鷺 十二ひと絵  
揚州周延画 筆者蔵

鷺にや尾がない やれはづかしや  
是は鷺を見ていふ詞也。

(元禄期鳥取わらべうた 野間義学者「筆のかす」所収)

鳥取藩士、野間義学の享保一七年(一七三二)頃成「筆のかす」は、まとまった伝承童謡の記録としては世界最古とされる。その写本『古今童謡』が筆者尾原により発見され鳥取県立博物館に収蔵された。尾原・大嶋・酒井共著の『古今童謡』を読む(今井出版)の序に、日本歌謡学会名誉会長の真鍋昌弘先生がこの唄をとりあげられ、「尾羽が短い鷺をはやしたのである。鷺も思っているであ

ろう「はずかしさ」をいったんは受け取って、それをまた投げ返した。」と解説してくださっている。



蓮 山本昇雲画 筆者蔵

二千年も前の弥生時代後期のものと言われて驚かされるが、それ以上に古い古代ハスとされる埼玉県行田市の「行田ハス」もあり、ある年その広大な蓮苑のなかで私も早朝にみごとに開いていく花々を眼前に見、まさに身を極楽におくような深い感動をおぼえたことを忘れることができない。

泥沼から生じながら濁りに染まらず、清く美しく咲く蓮華は、仏教の象徴的な花であるとともに蓮華座として仏さまが座したもう貴重なもの、一方食用としての蓮根も私たちになじみのもの。七、八月頃の早朝に白・ピンク・紅色などの大きな花を咲かせ、昼には閉じる。千葉市の「大賀ハス」は

れんげれんげ  
つーぼんだつーぼんだ やつとことつちや つぼんだー  
ひーらいいたひーらいいた やつとことつちや  
ひーらいいたー ひーらいいたー

(江戸わらべうた 釈行智著「童謡集」文政3年成)

わらべうたの代表的なものとして誰でも幼少時に経験のある「ひらいたひらいた」の古型は、このようなものであった。明治の頃には学校の遊戯のひとつにもなり、全国的な流行へと広がっていく。次は樋口一葉『たけくらべ』(明治二八年)、および中勘助『銀の匙』(大正元年)からの文学上の一節。  
「大路を見渡せば罪なき子供の三五人手を引きつれて開いた開いたなんの花ひらいたと、無心の遊びも自然と静かにて、廓に通ふ車の音のみいつに変わらず勇ましく聞こえぬ。」  
「お国さんたちはいつもれんげの花ひらいたをやっている。伯母さんはそれから家で根気よくその謡を教えて下稽古をやらせ、それが立派にできるようになってからある日また私をお向こうの門内へつれていった。そうしていじけるのを無理やりにお国さんの隣へわりこませたが、いくじのない二人はきまりわるがって手を出さないで、伯母さんはなにかと上手にだましながら二人の手をひきよせて手のひらをかさね、指をまげさせて上からきゅっと握ってようやく手をつな

虹を見る(部分)  
上村松園画 日本の名画808より



渡ろ渡ろ あの橋渡ろ  
虹の橋渡ろ 笠着て渡ろ  
渡ろと思たら 渡らんまに消えた

(京都府宇治市わらべうた)

宇治川の清流と緑の山々を背景に美しい虹の橋が立つ夢のような風景。それもつかの間、夢はあっというまに消え失せる。理想と現実のきびしさを思わせるわらべうたである。

## 季節に遊ぶ



ままごと  
山本昇雲画 筆者蔵



魚釣り  
宮川春汀画 筆者蔵

魚捕り  
大和名所図会より  
竹原春潮画



蟬捕り  
江戸名所図会  
長谷川雪旦画



祭りのおめかし  
山本昇雲画 筆者蔵



「花火召ませ」此筒は流星と申花火。水に入、雲に入り様々の仕掛け有。御目にかけん」  
これは江戸の花火売りの売り声。江戸の花火の老舗は日本橋の「鍵屋」で、後になって暖簾分けした「玉屋」が競演することとなる。花火を見るときの掛け声「たまやーかぎやー」はそれにちなむ。

花火 両国花火之三曲(部分)  
揚斎延画 筆者蔵



「あゝ今日は盆の十六日だ、お閻魔様へのお参りに連れ立って通る子どもたちのきれいな着物きて小遣ひもつてうれしさうな顔してゆくは、定めて定めて二人そろって甲斐性のある親をばもつてゐるのである。」

(樋口二葉「にこりえ」明治一八年)

をつけ、このようにうたいながら村はずれまで精霊を迎えに行く。

影絵  
山本昇雲画 筆者蔵



祭の日

「おついたちは祇園さんで 七日八日はお薬師さんで  
十七八日は観音さん 二十五日は天神さん  
二十八日は不動さま」

京都における月々の主な縁日をうたう端唄である。もちろん縁日のほかに四季折々の盛大なお祭りもあって、庶民の信仰がいかに日常の暮らしに融けこんでいたか、また日本人がどんなにかお祭り好きかをよく物語っている。それは大人も子どももまったく同じ。みんなお祭りの日を指折り数えて待ちわびるのだ。



螢狩り(部分) 四季の詠  
揚州周延画 筆者蔵



入谷の朝顔市 東京風俗志  
松本洗耳画

ねぶたコ流れる (笛・太鼓)  
豆の葉さとまれ (笛・太鼓)

(青森県弘前市 眠り流しう)

「いまだ暮れはてぬに、童(中略)丈ばかりの棹の末に色絵かいたる、方なる火ともしに七夕祭としるして、そが上に小笹薄などさしつかね、手ごとにさげ持て、「ねぶたもながれよ、豆の葉もとどまれ、芋がら芋がら。」とはやし、鼓、笛に声どよむばかり歩く。」

(陸奥国下北大畑(ねぶたながし) 菅江真澄日記「牧の朝露」寛政五年・七九三)

お精霊 迎えに行こ  
明かりについて ござれござれ

(新潟県長岡市 精霊迎えうた)

この地方では八月十三日の夕方、子どもたちが豆がらを芯にした松明に火



お迎え火 明治博多往来図会  
祝部至善画



樽神輿・獅子舞 子供遊画帖  
鮮斎永濯画 筆者蔵

飴細工 明治博多往来図会  
祝部至善画



地藏盆 続浪花風俗図会  
三代 長谷川貞信画

橋の下の六地藏 鼠がちよとかじった 鼠こそ地藏さんや  
鼠こそ地藏なら なんて猫に捕られた 猫こそ地藏さんや  
猫こそ地藏なら なんて犬に捕られた 犬こそ地藏さんや  
犬こそ地藏なら なんて狼に捕られた 狼こそ地藏さんや  
狼こそ地藏なら なんて火に焼かれた 火こそ地藏さんや  
火こそ地藏なら なんて水に消された 水こそ地藏さんや  
水こそ地藏なら なんて人に飲まれた 人こそ地藏さんや  
人こそ地藏なら なんて地藏拜んだ ほんまの地藏は六地藏  
(大阪府高槻市 わらべうた)

子ども遊びの歴史のなかで最も古いもののひとつといえる「子をとり子とり」は、地藏尊によって地獄の子どもたちが鬼から救われる様子を形に表したものとされる。「橋の下の六地藏」は中世の地藏舞の歌にちなむ伝承で、宮澤賢治の母イチが幼い兄弟姉妹にうたった子守唄「道ばたの黒地藏」(岩手県花巻市)もその類歌である。また福岡県久留米市には『賽の河原地蔵和讃』にもとづく「賽の河原を眺むれば、黄金づくしの地藏さんが、あまたの子どもを引き連れて、日にち毎日砂遊び」とうたう子守唄もある。

【追悼】

帯津良一

# 白隠さん 最後の大作



何とも粹ではありませんが、どんな顔をして言ったのでしょうか。鼻の下を伸ばしていたわけではないでしょう。ただただ無邪気な白隠さんの姿が浮かびます。

横になるや白隠さんは大いびきをかいて眠り、目を覚ますや別人のように元気になって説法を再開しました。(『汝のころを虚空に繋げ』風雲舎)

私は現在86歳。あとのくらしい生きられるかわかりませんが、すでにあの世に居を移している飲み仲間と再会する日を夢見て、わくわくしています。そして、その前にこの世での大きな楽しみが待ち構えています。

それは、常に敬愛して止まない白隠禅師(1685〜1768)の故事にならって、死ぬ1カ月ほど前に、中年のふくよかな女性に抱かれてしばしの時を刻んでみたいということなのです。

ということかなのか。出典は『白隠禅師 健康と逸話』(直木公彦 日本教文社)なのですが、より平易な文章でということに拙著から引用させていただきます。

1768年(明和5年)、白隠さん84歳(満年齢で83歳)となりました。休みなく説法を続けていたが、さすがに高齢ですから、はたから見ても疲れきっているのは明らかでした。11月のある日、

「少し横になったらいかがですか」  
まわりの僧たちは白隠さんの身を案じて声をかけました。

「多くの人が法に飢えているのじゃ。そんな暇などない」

白隠さんは耳を貸しません。しかし、今にも倒れそうです。このままにはしておけません。僧たちは困り果てていました。

そんなとき、どういう経緯かはわかりませんが、40歳くらいのふくよかな女性が登場します。そして白隠さんにこう言います。

「多くの人が法に飢えているからこそ申し上げるのです。少し休んで、体調を調べてから法をお説きください」

このときの白隠さんの返答が振るっているのです。

「汝我を懐にして熟睡して一覺せしめれば即ち法施を開かんと」

添い寝をしてくれればゆっくり眠れる。目が覚めたら法を説こうじゃないか。



で私も彼に連れられて「道祖研究会」の門を叩いたのです。リーダーの長充也さんは昭和8年生まれ。プリンスと呼ばれるだけあって、容姿端麗な好青年です。呼吸法の迫力も決して人後に落ちるものではありません。

参加者はいずれも若手の男女が7〜8人。都立駒込病院からは歩いていける距離です。せつせと通ったものです。終わってからの近くの中華料理店の杯を傾けながらの呼吸法談議も大いに勉強になりました。

しばらく通って、呼吸法の基本がわかりかけたところで、長く続けるのなら、本部に入会するのが筋だろうと、あらためて本部の門を叩いたものです。こちらは打って変わって30人を超える大勢さん。お年寄りも多く、道祖研究会とは雰囲気はかなり異なります。

注目的はなんとといっても会長の村木弘昌先生です。年令は60歳くらいか。小柄で声も小さく拳措は至って静か。とても一流一派の総帥には見えません。実習の間に入る講話も、小聲な上に抑揚がなく、いつも眠気を催して困ったものでした。

しかし、の講話内容はさすがでした。「三代体



毎日が旬  
生まれたる

腔理論」をはじめ呼吸法に現代医学の光を当てつつけた功績では決して人後に落ちません。それでいて呼吸法のスピリチュアルな面もしっかりと重視していたのですからすばらしいです。その代表が白隠さんです。

白隠さん自身も、その著

作である『夜船閑話』も先生の講話のなかにいつも登場していました。虚空をも含めた広大な世界に私を導いてくれたのは、じつは村木弘昌先生なのです。『夜船閑話』を読みすすめながらの感動が今でも鮮やかに蘇って来ます。また、私が協会の3代目の会長をお引受けしたのも、村木弘昌先生の強い要請によるものなのです。そんなご縁で、4年ほど前に東京芸術大学で開かれた講演会で講演したことがあります。

始まってまもなく、最前列の中央にふくよかな女性がいるのに気がついたのです。咄嗟に白隠さんの例の逸話を話題にしました。そして講演が済んで降壇すると、目の前にふくよかな女性が笑っているではありませんか、

「白隠さんを抱いた女性のように、私のお相手をしてくれませんか」

「いいですよ……」

とにっこり。まさに白隠さんの三役揃い踏み。うれしさが虚空一杯に拡がります。

## 帯津良一 プロフィール

1936年、埼玉県川越市に生まれる。東京大学医学部卒業、医学博士。東大医学部第三外科に入局し、その後都立駒込病院外科医長を経て1982年、川越市に帯津三敬病院を設立。2004年には、池袋に統合医学の拠点、帯津三敬塾クリニックを開院。  
日本ホリスティック医学協会名誉会長。著書に「代替療法はなぜ効くのか?」「健康問答」など。その数は100冊を超える。

日本子守唄紀行 鵜野 祐介 (立命館大学教授)

# 第3回 「根来の子守唄」 (和歌山県岩出市)

今年(二〇二二年)六月上旬、和歌山県岩出市にある根来寺を訪れました。大阪・天王寺駅からJR紀州路快速に乗って五〇分、和泉砂川駅で下車し、駅近くのスーパーで昼食用のめはり寿司(胡麻をまぶした千切りのお新香が入った酢飯を高菜で包んだおにぎり)と鯖の高菜巻き寿司を買い、岩出駅行の路線バスに乗って一五分、岩出図書館停留所で下車して徒歩で一〇分ほど行くと、右手に巨大な大門が見えてきます。そこからさらに、五分ほどならかな坂道を上っていくと、



の季節は格別の趣きがあると受付でいただいた「根来寺案内」にも記されています。この日は紫陽花と睡蓮が盛りを迎え、ウグイスをはじめ鳥たちの鳴き声が木霊していました。鐘楼門をくぐり抜け、光明殿、行者堂、聖天堂、庭園などを拝観した後、本坊寺務所を出て、奥の院、大塔、大師堂、大伝法堂へと向かう途中、溪谷に架かった滝見橋を渡り終えた上り道右手に、「根来の子守唄」の歌碑があります。

「新義真言宗 総本山 根来寺」の石柱が見えます。根来寺は、一三二(長承元)年高野山に開かれた大伝法院を始まりとする新義真言宗の総本山で、開祖は覚鑿上人(一〇九五―一四三)です。一五〜一六世紀には全国から学問を志す僧侶が集まる大寺院として繁栄しますが、やがて天下統一を目指す豊臣秀吉と対立することになり、天正一三(一五八五)年三月に秀吉軍が攻め入り、大塔・大師堂など二、三の堂塔を残して全山焼失しました。しかし江戸時代には徳川家の外護のもと、大門・伝法堂・不動堂など主要な伽藍が復興され、また、東山天皇より覚鑿上人に「興教大師」の大師号が下賜されました。現在の境内は三六万坪。中世の佇まいを遺す境内は四季の変化に富み、桜・青葉・紅葉

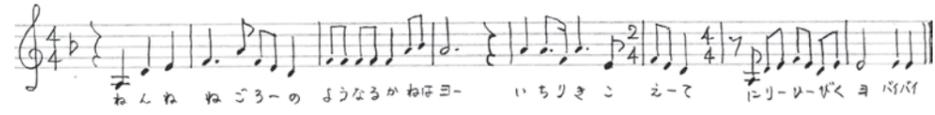
こと。溪谷には薄紫のシヤガの花が咲き乱れていました。その日は岩出市(当時は岩出町)民俗資料館の方や、根来の子守唄保存会の方にお話を伺いました。岩出市は、本連載第二回に紹介した岡山県井原市で一八九七年に始まった「全国子守唄サミット」に当初より参加し、第三セクター井原鉄道の「子守唄の里高屋」駅ホームの高架コンクリート柱にも「根来の子守唄」の歌詞が記されている通り、子守唄による地域おこし活動をともに進めてきた井原市のいわば盟友です。岩出町が一九九九年、「第一二回全国子守唄サミット&フェスタ99 in 岩出」用に制作したCD音源から私が採譜した楽譜と歌詞を掲載しておきます。

一、ねんね根来の よう鳴る鐘はヨ 一里聞こえて 二里ひびくヨ バイバイ  
二、ねんね根来の かくぼん山でヨ としよ来いよの 鳩が鳴くヨ バイバイ  
三、ねんね根来へ いきたいけれどヨ 川がおとろし 紀ノ川がヨ バイバイ  
四、さんざ坂本 箒はいらんヨ お不動詣りの 裾はくヨ バイバイ  
五、ねんね根来の 塔の堂の前でヨ 横にはうかよ がりゆう松ヨ バイバイ  
六、さんざ坂本 室家の娘ヨ 嫁入りしたとて 住蛇池ヨ バイバイ

「ミ・ファ・ラ・シ・ド・ミ」という都節音階の物悲しい旋律でゆったりと歌われています。歌詞は七・七・七・五の近世俗謡調です。一九八六年刊行の『岩出町誌』の他、中西包夫『和歌山のわらべ歌』(柳原書店)にも「ねんね根来の」[一][二]として、和歌山市布引、那賀郡貴志川町神戸、日高郡印南町、有田郡湯浅町、那賀郡岩出町他の類歌が収載されていますが、これらの資料によれば、二番の後半部は「としよ」の他に「としようじ」「としより」「としより」とも歌われ、秀吉の根来攻めで不意に背面をつかれた悲しみを鳩が代弁して、徳川方の援勢を願って鳴いた「東照神(II家康)」を示しているとの説があるようです。

三番の「川がおとろし(恐ろし)紀ノ川が」とは、現在は根来寺から南へ約四キロのところを流れる紀ノ川が、以前は大雨のたびに氾濫を繰り返す暴れ川だったことを指すと言われます。また五番の「塔の堂」は国宝の大塔を、「がりゆう松」はかつてこの塔の前に「臥竜松」と呼ばれる、臥した竜が這うように枝を伸ばした松があったことを歌っています。

六番の歌詞をめぐっては、次のような伝説が残っています。「根来山の麓、西坂本に室家忠家という豪家がありました。子どものいない家だったので小野小町のお墓に参り願をかけたところ、その甲斐あって小町そっくりの美しい桂姫をさずかることができました。桂姫が年頃になった頃、毎夜彼女の枕元へ美男が現れては朝になるとどこへ行くともなく消えていくのでした。やがて、桂姫が和泉国尾崎の大原高広という北面の武士に嫁ぐ日がやってきまし



た。豪勢な嫁入行列が住持池にさしかかった時、池から突然大蛇が現れ、姫をさらって再び水中に没しました。娘を失った母は悲しみ、三日三晩火を焚いて祈禱しました。四日目の朝、池のそばに立ち、せめてもう一度でよいから娘の顔を見せてほしいと涙ながらに祈ったところ、水面に大蛇と桂姫の半身があらわれました。母は娘を抱きつこうとしたが、その瞬間、そこには仲よく二匹の大蛇の泳ぐ姿がありました。桂姫は小野小町の、大蛇は小町に思いを寄せて叶わなかった深草少将の生まれ変わりだと言われています(『岩出町誌』および岩出市公式HPより再構成)。

「住持(じゅうじ)池」、別名「住蛇(じゅうじや)池」は、岩出図書館から五百メートルほど西にある周囲約四キロの大きな池で、その東側には坂本神社が建っており、池の周囲の鬱蒼とした木立は今も何モノかの気配を感じさせます。和歌山の「蛇娘」伝説と言えは思い出されるのが日高川町にある道成寺の「安珍清姫」ですが、ここでは清姫のみが蛇に変身するのに対して、この桂姫の話では男女ともに蛇身となっており、小野小町にまつわる伝説となっているのも特徴的です。和歌山には蛇や竜にちなんだ地名や伝説がたくさんありますが、それはこの地が豪雨・土砂崩れや旱魃といった、水がもたらす災害の頻発する地であることや、銅や鉄鉱石をはじめとする鉱石の豊富な地であることと関係があるように思われます。蛇や竜は「水の神」「金属の神」として知られているからです。そんな紀州和歌山の歴史や氣候風土を刻み込んだ「根来の子守唄」を、これからもぜひ歌い継いでいきたいものです。

直島便り ⑱

コロナ過でもアートは変わらない



南無庵 庵主 山根 光恵  
山口県長門市出身  
浄土真宗本願寺派 布教使

今年の四月から、直島を中心とした第五回目的の瀬戸内芸術祭が始まった。

春、夏、秋と会期は三期にわかれ、オープニングは建築家の三分一博志氏が設計した直島ホールにて、直島の伝統芸能である「女文楽」上演を皮切りにし、芸術祭の幕が開いた。

芸術祭は、三年前からの計画ではあったが、何しろコロナのせいで予想できない事態が起こり、外国人のアーティストは来日もままならず、展示される作品の完成自体、遅れに遅れたようである。しかし、コロナで閉塞感を長く味わった住民にしてみれば、三年に一度のアートの祭典で、にぎわいが欲しいという切実な想いもあったため、何とか無事に春会期が開催できたことにほっとした人も多いようであった。

前回までは外国の人の観客がたくさん訪れたが、今回はまったくいない。しかし人が少ないため、これまでになくじっくりと作品を味わうことができた、ともいえる。瀬戸内芸術祭は瀬戸内の島々、それぞれに縁を持ったアーティストたちに島の住民も関わり、一緒に作品をつくりあげ、それを観客に見せるというものであり、その参加意識も味

わいの深いものがあり、人気が高い。

直島ではこの度、新しい施設や作品が登場した。そのなかでは特に杉本博司氏の施設



「杉本博司ギャラリー 時の回廊」の中に置かれた作品『硝子の茶室「聞島庵」』が目玉を引く。ホテル「ベネッセハウスパーク」内の庭、その芝生の中に小川を作り、その先にガラスのお茶室ができて

いる。小川の流れば、茶室の空調の役目を果たしているのかもしれない。ガラスの外からは中が見え、中でお茶を味わうと、小川のせせらぎと瀬戸内の海、山の風景が楽しめるのだろう。芝生の緑は、じゅうたんに見立てているのだろうか？ 実際にはそのお茶室に入るというよりは、ホテルのラウンジから、そのガラス張りのお茶室を眺めてお茶やお菓子を味わって、そのガラスの茶室の中でお茶をいただいたら、どんな味わいだろうかかと推察することを意図とした作品のようだ。もうひとつ注目なのが、新たに誕生した「ヴァ

レーギャラリー」という施設で展示されている草間彌生のインスタレーション作品『ナルシスの庭』だ。祠のような空間や、小さい池の中に、無数のミラーボールがしきつめられ、そのミラーボールは、自然の風で常に動いている。それらのミラーボールを見ると、一つ一つに自分の姿が映っている。それにどんな意味があるのかを自分で好きなように考え感じるのが、現代アートなのである。春会期が始まる前に、周辺のごみ拾いのボランティアをかねて、友達と作品を観に行った。昔、東京で勝間橋のすぐそばのマンションに住んでいたころ、日曜日の朝など、人通りの少ない時に勝間橋のごみ拾いをよくしたものである。その思い出もあって、直島に来てからも、いつもごみを拾っている。そうするうちに友達が増えて、芸術祭が始まる前に周辺のごみを拾いましょうと一緒にいった。取りにくいところにあると、手をのぼしたり、傾斜のところでは足を広げたり伸ばしたり、「これこそ年寄りのためのリハビリだね」と楽しくなってくる。けがをしない程度に遊び半分のごみ拾い。何でもどこでも、楽しいことはある。

合掌



「士・黙示録」

山田道幸著（文芸社刊）

INTRODUCTION

著者の山田道行氏は、50年来の私の友人、というより先夫の井上ひさしさんの仙台一高時代の同級生という関係です。私達が離婚した後も双方と依然と変わらぬ親交を続けてくださいました。当時若かった道幸先生は歯科医師の傍ら新田次郎門下の一文学者で、来仙の折は夜を徹して文学論に花咲かせたものです。

この本は氏が三年という長い年月をかけて時代に黙殺されたという、伊達政宗の政策の一つ伊達の黒船と呼ばれた遺欧使節の航海記録を軸にして支倉常長の生涯とキリスト教の何かを現生の人間の目で書かれています。異教の宗教がやがて日本の宗教界にどんな深い思想と安らぎの精神を与えたか、伊達の武士とキリスト教の士こそ、日本の根源にあるということ、大きな発見でした。宗教界が低迷している中、ぜひ日本人が読んでいただきたい心底そう思いました。読むには

根気と集中力が必要です。私も読むに三日間むかかりました。そして、歴史という宝物に圧倒されました。



活動報告

CDアルバム「ソング・フォー・マイ・マザー」に

ラッパック・レコード

男はみんなマザーコンの部分をもっている。そんなスタンスで、母を歌い、母に捧げる。思いをさまざまな角度から、著名な音楽家たちによって楽曲が作られました。不思議に懐かしく、ふと、母に抱かれ、母を抱いた気になる旋律を持っていきます。夜のベットで聞いて欲しい曲ばかりです。私もジャケットに一文を寄せさせていただきます。



原庄介×西館好子二人サロン

「明日への伝言 子守唄に魅せられて」6月17日(金)

赤坂の一等地にあるサロン「シルビー」はかつて政財界、著名人が夜な夜な足しげく通っていた名物サロンです。ママの江藤昭子さんは客の間を泳いで接客していました。その頃からの知り合いで、そのご縁に甘えて、お店をお貸し頂きました。

原庄介さんと50年来の友人、子守唄協会の最初からの同士です。子守唄の原点に返ってという試みでサロンの開催してみました。溢れるほど満員でびっくり。第二回目も計画中です。



配食（毎月二回木曜日）

樋田さんが退職のため、西館が皆様と対応致しました。この配食で助かっている事、現在の生活事情などお伺いさせていただきます。

皆さまは生活の困窮より、まずは求職が当面の希望、出来れば正社員で、パートや臨時はあまり視野には入っていないようです。不安を解消したいという希望が圧倒的で、子どもの学校のことや、家での引きこもりなどの対応に頭を痛めています。スマホの問題も大きく、まったく手放すことが出来ないという子供たちと争いになることが多いという事でした。

おひとりの方は三人の子持ちですが、総収入20万円、そのうち8万円が家賃という中で生活苦、食費には5万円ほどとか、大変な中で暮らしているという事も理解しました。上目線や、かわいそうといった自己満足で配食をしているわけがなく、生きて行く中にはこうした時期もあり、何とか乗り越えていただきたいと切に願っています。

# 応援がしてくださいます

協会の活動にご協力くださいました皆様、ご寄付を有効に使わせて頂きます。これからも日本ららばい協会への応援をよろしくお願い申し上げます。温かなご支援を本当にありがとうございます。

2022年4月1日から2022年6月30日現在 五十音順

## 「個人」

- 青戸雅之
- 青山 司
- 阿川文正
- 浅利香津代
- 阿部輝彦
- 阿部由里
- 池本幸一
- 井坂義雄
- 井田範子
- 伊東信子
- 伊藤 守
- 今井要一
- 今村威
- 鶴野祐介
- 梅田郁子
- 江藤昭子
- 海老沢勝二
- 江村清
- 大野隆司
- 岡本喜久穂
- 奥山糸子
- 長田暁二
- 小貫洋子
- 小野静雄
- 小野寺純治
- 尾原昭夫
- 帯津良一
- 小山芳郎

- 加賀山昭
- 春日宏美
- 片山雅文
- 門山榮作
- 川井徳子
- 川下則子
- 菊池弥生
- 木瀬公二
- 北出広子
- 木下由美子
- 木村泰雄
- 久世明子
- 国見修二
- 小泉晶一
- 兒玉圭司
- 近藤征治
- 斉藤光恵
- 酒井董美
- 坂野紀多子
- 坂野美恵子
- 佐藤厚行
- 佐藤久子
- 沢田 敬
- 沢田茂子
- 澤村照子
- 神 秀俊
- 菅原道夫
- 菅原芳徳
- 杉浦 あい
- 須崎晃一

- 鈴木 としお
- 袖山榮真
- 田井二郎
- 高野展子
- 高橋 寛
- 高橋如晴
- 高松榮子
- 多田式江
- 田中厚子
- 棚澤青路
- 田邊邦典
- 玉井祥子
- 玉谷邦博
- 千葉伝
- 泊 和男
- 永田 亨
- 長縄千鶴子
- 中根宏昭
- 永見徳代
- 中山公子
- 南部昌宏
- 西尾まき
- 西前幸子
- 庭山正一郎
- 則武清司・美佐子
- 橋爪八重子
- 橋野三千夫
- 初澤永子
- 原 昭邦
- 原直之

(敬称略)

- 治田るり子
- 平川正二郎・一代
- 平沼美春
- 福井典子
- 福島昭子
- 福永教正
- 藤島寛昌
- 藤森久美子
- 本條秀太郎
- 本多宏子
- 本間涉夏
- 町田ゆき子
- 松代洋子
- 松原健之
- 三浦敏昭・美智代
- 宮地勝美
- 村田正巳
- 山川 忠
- 山川 敏明
- 山崎秀甲
- 山下五郎
- 山下貞子
- 山本絵津子
- 谷村啓子
- 湯川れい子
- 横沢裕子
- 吉田紀世子
- 吉田 博
- 米野宗禎
- 渡辺久子

## 「団体」

- 全国わらべうたの会
- 株式会社ミールケア
- よし田



## ご寄付の応援を お願いします！

日本ららばい協会の活動は、皆様からのご寄付に支えられております。すべての子ども達が希望に満ちた未来をつかめるよう、皆様のお気持ちの託された寄付金を、様々な活動にいかしてまいります。

ご寄付をいただきました皆様には小冊子「ららばい通信」、イベントのご案内、また活動報告をお送りさせていただきます。どうぞ時期や金額に関わらず、年間を通してご寄付をお願い申し上げます。

ご寄付への詳細は、日本ららばい協会事務局までお問い合わせください。

### 【寄付振込先】

- みずほ銀行 浅草橋支店 (普)1090012 トクヒ)日本ららばい協会
- 郵便振替口座 00150-3-575309

## 皆様からのお便り・ご投稿をお待ちしております。

- ◎子守唄について疑問に思うこと・知りたいこと、子育てについて思うこと、親子の思い出話などお送りください。思い出の写真なども募集しております。
- ◎あなたの町の地域活性化のための活動や育児支援活動、町ならではの活動など紹介したい情報がありましたら、ぜひぜひお教えください。「ららばい通信」を通じて地域の情報交換をしませんか？
- ◎皆様と共にららばい通信をより良いものにしていきたいと考えております。お気軽にご意見・ご感想をお寄せください。

## 日本ららばい協会事務局 編集人・西館好子

〒125-0054 東京都葛飾区高砂3-13-13 三浦ビル1階  
TEL 03-6458-0283  
FAX 03-6458-0284  
Eメール info@komoritajp  
URL https://www.lullaby-komorituta.com (準備中)

ららばい通信ご入用の方は当協会にご連絡下さい。また、保存希望の施設や団体の方も合わせてお申込みくださいませ。